

杉立義一著『医心方の伝来』

医学書の書誌学的研究は時代を遡るほど難しい。永観二年（八九四）丹波康頼が円融上皇に献上した『医心方』三十巻は隋、唐などの医書百数十種を引用して編纂した医学全集であるが、系統的な書誌学的研究は幾度か手をつけられながら、医学史的に納得できる研究成果が見られていなかったのが実情である。その原因は康頼の献上本が長く宮中に秘蔵され、更に正親町天皇の代に典薬頭であった半井瑞策に下賜され、以来代々門外不出の貴重書として護持され、徳川幕府の権力をもってようやく仁和寺本、半井本が秘庫から幕末近くになってどうやら陽の目を見るところで、その秘本性が現代まで尾を引いていた。従って『医心方』の対比研究資料の収集そのものが容易なものでなかったのである。

現在のように複写技術が発達していても、五十点以上にのぼる貴重書の各種写本を取り揃えることは想像以上に困難なことである。

半井家本、仁和寺本を初めとし、全国的な資料採訪を精力的に行い、資料の一つ一つを確認考証したのちにまとめ上げたのが本書である。しかも、多忙な開業産婦人科医としての日常診療と並立させて仕上げられたのである。まことに驚くべき努力であり執念である。

このような深く一事に傾倒してゆく人柄と積み上げられた医学・史学の基礎学力なくして、またこの人なくしては、この研究はまとめ上げられなかったと言っても過言ではない。

京都という『医心方』のふる里は、王朝文化研究の学問的環境とその人材にこと欠かぬ最良の研究の場であり、有形、無形の諸好条件がこのような膨大にして困難な研究を支えたのである。それに、誠実な著者の為人は多くのすぐれた協力者を得ることが出来た。誠に当然なことと言え、幸せなことであった。

本書の編述構成は総論的な項目として(一)『医心方序説』の項で①撰述の背景としての中国医学の受容、平安時代の疾病、医療の状況などに触れ『医心方』の内容の概説から、現代に至るまでの『医心方』への歴史的な関わりについて理解し易く述べられている。②『医心方』の伝写と刊行の項は『医心方』書誌の概説であるが、調査された五十二点の写本をA群∥半井家の系統、B群∥仁和寺本の系統、C群∥延慶本の系統、D群∥金剛寺本、E群∥卷二・卷四の系統、F群∥多紀家蔵卷二十二の系統、G群∥その他の零本、H群∥卷一の諸薬和名第一の写本の八群に分類し、『医心方』伝来考証の研究方法が賢明で理解し易い提示である。それに「散佚した写本」十四種を明示し、現代に至るまでの刊本十八種が紹介されているのは、研究目的にかなっており、簡にして要を得ている。

各論の第一部は『医心方』の書誌学的な論述であり、(一)半井家本、(二)仁和寺本、(三)成實堂文庫本、(四)延慶本と金剛寺本、(五)紅葉山文庫本（内閣文庫本）と多紀家本（東博本）について、詳細な

考証が行われている。その一卷一図の書き入れまで紹介され、更に脚註によってそれを補うという慎重な配慮が行われている。

ことに成實堂文庫本の巻二十二妊娠篇については、著者が医療で専門分野であることもあって、多くの図版とともに、半井家から流出した以後の興味あるエピソードが豊富な資料によって紹介され、その祖型を馬王堆発掘医書と主張する。

半井家本の影写と刊行の項では、書陵部本と安政版の成立に至るまでの多紀氏とその一門の動向、それに楊守敬らによる『医心方』の中国への紹介の経緯が紹介されている。

『医心方』の伝来、ことに伝写についての考証は「医心方伝写の系統図」を提示している。日本医学史上における『医心方』の受容と活性については一期『前医心方』期(四二—一九八三)、二期『医心方』活用期(九八四—一三〇二)、三期『医心方』衰退期(一三〇三—一六〇二)、四期『医心方』復刻期(一六〇三—一八六七)、五期『医心方』廃用期(一八六八—一九六四)、六期『医心方』再評価期(一九六五以降)という興味ある提案が行われ、理解し易い図表も工夫されている。

各論の第二部は『医心方』と関係の深い和氣(半井)氏とその五支家それに丹波氏およびその一族である錦小路家、親康家、施薬院家について、文書資料および遺跡、民俗調査までを駆使し、従来よく知られるところのなかった詳細な記述は今後の研究の足がかりとして貴重である。

巻頭には現在は文化庁所蔵の国宝となった半井家本をはじめ、仁和寺本、成實堂文庫本医心方が鮮明なカラー版として紹介され

ている。また『医心方』関連略年表は本書の通読をより理解し易くしている。各章、節における脚註、参考書の他に、巻末に「医心方関連書目」として追年的に『医心方』に関する主要論文、著書が整理されてある配慮は、誠実で謙虚かつ丁寧な著者の人柄がにじみ出ている思いがする。精細な索引も研究者にとって有り難い。

『医心方』が日本の至宝の医書だけではなく、その祖型と見られる近年中国の馬王堆発掘医書に遡ることを産婦人科医の視点から論証されたように、東アジアにおける人類の共通の貴重な文化的遺産であると言う著者の主張には異論がない。広い視野での研究成果である。

昭和五十九年十月十日医心方撰述一千年を記念して京都市の御寺泉涌寺山内、今熊野観音寺境内(医聖堂傍)に「医心方一千年記念の碑」が建立された。これに伴う諸記念事業に陰の人として尽力された著者が、ライフワークとして一つ一つ積み上げて来られた『医心方』の研究をまとめられたのが本書である。

『医心方』の書誌学的研究というだけでなく、日本医学史の基礎的研究としても水準を越えた力作である。

(蒲原 宏)

〔思文閣出版・千六〇六京都市左京区田中関田町二一七
☎〇七五一七五一—一七八一、平成三年三月・A5判・
三九〇頁・定価一〇、〇九四円〕